

塩竈市文化財調査報告書第5集

は は こ ざ わ い せ き
母 子 沢 遺 跡

平成13年3月

塩竈市教育委員会

は は こ ざ わ い せ き
母 子 沢 遺 跡

序 文

今回行われた「母子沢遺跡」発掘調査につきましては、地権者及び各方面関係機関より全面的なご理解ご賛同を賜わり厚く御礼申し上げます。

平成12年8月に調査した本遺跡は、多賀城跡東門の東約500mに位置する古代の遺跡です。東門・総社宮から東に延びる尾根状の丘陵頂部に立地し、陸奥国多賀城と古代塩竈の国府津（国府の港）を結ぶルートの一画にあることから、古代の道路が通過していた可能性の高い場所であります。

今回の調査により、本遺跡に溝跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡が発見されたことにより、あらためて陸奥国多賀城と古代塩竈の関係を考察する上で重要な遺跡であることが証明されました。

この調査結果により貴重な資料を得ることができ、本市のもつ歴史の一面が広く理解されることを期待しております。

今後におきましても、文化財保護とその活用になお一層努力して参りたいと思いますので、関係各位の深いご理解とご支援を賜わりますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり、全面的なバックアップをいただいた宮城県教育庁文化財保護課をはじめ関係者の皆さんに深く感謝の意を表し、発刊のことに替えさせていただきます。

平成13年3月

塩竈市教育委員会

教育長 武 山 清 彦

目 次

1 はじめに	1
2 調査成果	2
3 ま と め	9
写真図版	11

例 言

1. 本書は、宮城県塩竈市母子沢町に所在する、母子沢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の作成は、宮城県教育庁文化財保護課が担当し、整理・執筆・編集は課員の協議を経て古川一明がおこなった。
3. 本書における土色の記述には「新版標準土色帳（1973）」を使用した。
4. 本書の第1図は、建設省国土地理院発行の1/25,000の地形図「仙台東北部」・「塩釜」を複製して使用した。
5. 遺構の平面位置の表示は国家座標に準拠せず、任意に設定した座標によるもので、図中の方位表示はいずれも磁北を示す。
6. 遺構の略号は次の通りで、2桁の通し番号で各遺構に付した。
SB：掘立柱建物跡、SD：溝跡、SI：竪穴住居跡
7. 調査の記録や整理に関する資料および出土品は、塩竈市教育委員会が一括して保管している。

調 査 要 項

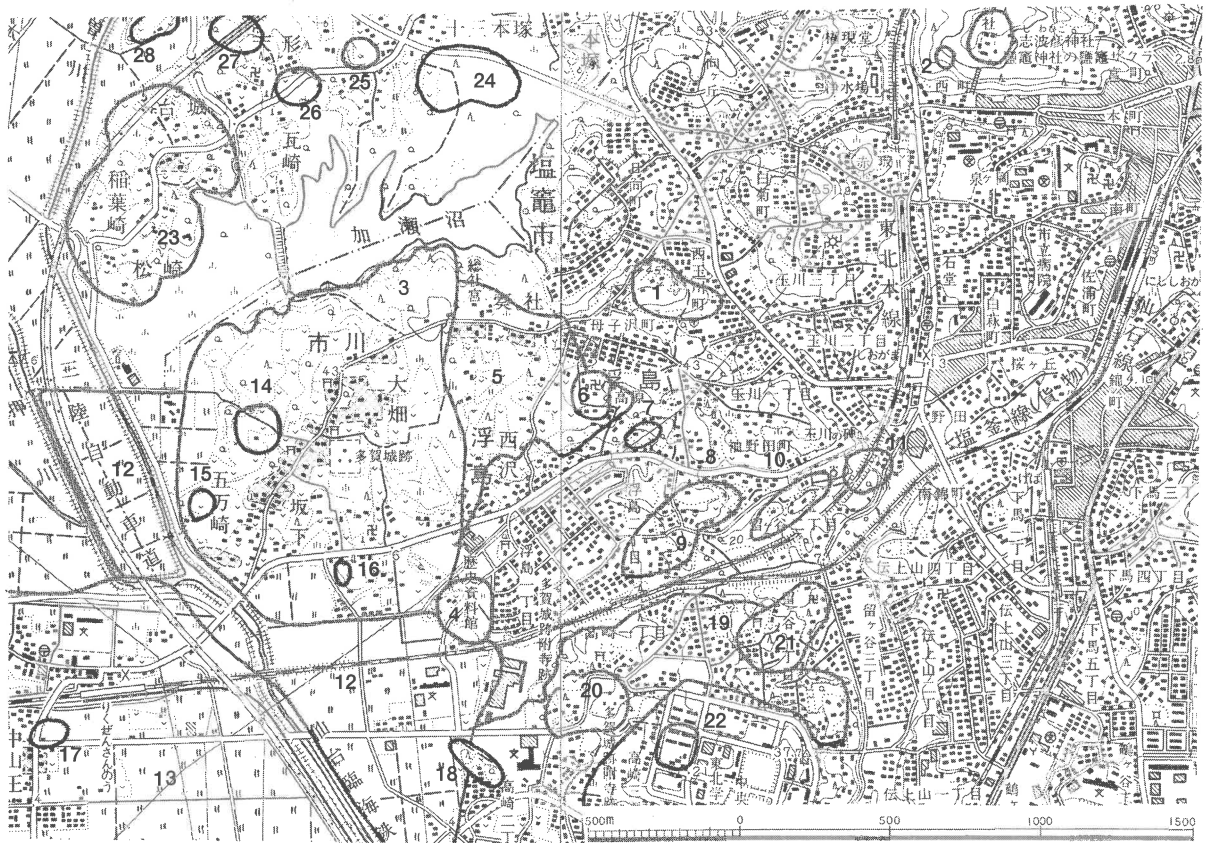
- 遺 跡 名：母子沢遺跡（宮城県遺跡登録番号11075）
- 遺 跡 記 号：TE
- 所 在 地：宮城県 塩竈市 母子沢町
- 発 掘 面 積：約850㎡
- 調 査 期 間：一次調査（確認調査）：平成12年6月20日
二次調査（事前調査）：平成12年8月21日～8月30日
- 調 査 員：一次調査（確認調査）：阿部博志・佐藤則之・天野順陽（宮城県文化財保護課）
井城信広・菊池 亮（塩竈市教育委員会）
二次調査（事前調査）：伊藤正夫・伊澤 章・井城信広・阿部繭子
菊池 亮・上總雅裕（塩竈市教育委員会）
古川一明・山田晃弘（宮城県文化財保護課）

(1) はじめに

遺跡の位置と環境

母子沢遺跡は塩竈市南西部の母子沢町に所在する古代の遺跡である。鹽竈神社の南西1.5km、多賀城市所在の古代の陸奥国府多賀城跡の東門から東に約500mに位置し、多賀城市との市境に近い。

当遺跡は、松島丘陵から派生した低丘陵上に立地し、遺跡付近の標高は45m前後である。この丘陵の西側は、多賀城跡外郭東門まで連続する尾根状の地形で、同一丘陵上には多賀城市西沢遺跡、同法性院遺跡など古代の遺跡が隣接して立地している。また、丘陵を下って北東1.5kmの鹽竈神社周辺は、古代の国府津「塩竈の津」が所在したとされる地域で、現在でも「香津町(こうづまち)」の地名が残されている。多賀城外郭東門から鹽竈神社裏門に至る古道が今回の調査区の北側を通過しており、古代においてもほぼ同様のルートが道路として利用されていたと推定されている。



第1図 遺跡位置図

遺跡No	遺跡名	種別	時代	遺跡No	遺跡名	種別	時代
1	母子沢遺跡	散布地	平安	15	五万崎遺跡	墓	縄文・弥生・古墳前
2	塩釜神社境内遺跡	散布地・製塩遺跡	縄文晩	16	田屋場横穴墓群	横穴墓	古墳後
3	多賀城跡	国府跡	奈良・平安	17	山王山地田館跡	城館	古代・中世
4	館前遺跡	官衛・城館	古代・中世	18	高崎古墳群	円墳	古墳中・後
5	西沢遺跡	散布地	古代・中世	19	加瀬遺跡	集落・城館	奈良・平安・中世
6	法性院遺跡	散布地・寺院	古代	20	多賀城廃寺跡	寺院	奈良・平安
7	高原遺跡	散布地	古代・中世	21	留ヶ谷遺跡	城館	古代・中世
8	袖野田遺跡	散布地	奈良・平安	22	御屋敷館跡	城館	中世
9	小沢原遺跡	散布地	古代・中世	23	加瀬遺跡群	散布地	縄文・古代
10	野田遺跡	散布地・城館	古代・中世	24	加瀬貝塚	貝塚	縄文中・古代
11	矢作ヶ館跡	城館・散布地	古代・中世	25	山屋敷遺跡	散布地	旧石器
12	市川橋遺跡	集落・散布地	旧石器～平安	26	窪遺跡	散布地	古代
13	山王遺跡	集落・散布地・貝塚	古墳・奈良・平安	27	天形遺跡	散布地	古代
14	金堀貝塚	貝塚	縄文前後	28	北窪遺跡	散布地	古代

調査経過と方法

平成12年6月、本遺跡内で住宅地の造成工事が計画されたため、確認調査を実施することにした。確認調査は造成予定地内に任意のトレンチを設定して掘り下げ遺構・遺物の分布を確認した。その結果、柱穴、竪穴住居跡、溝跡、土坑などの遺構が発見され、古代の土器類が出土した。この調査成果を受け、関係機関が協議した結果、工事が遺跡に及ぼす影響を少なくするため、宅地部分については掘削・切り土による工事を避け、盛り土によって造成をおこなうこととした。また、道路部分と対象地南側の擁壁設置部分については工事に先立って本調査が必要であると判断された。

本調査は、平成12年8月に市教育委員会が主体となり、県文化財保護課の協力を得て実施した。発掘調査の対象地は、造成地内のほぼ中央を東西に走る道路予定地と、南側の擁壁設置部分である。調査の結果、掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡2軒、溝跡3条が検出され、縄文土器、石器、土師器、須恵器、陶磁器類などが出土した。発見された遺構および調査区については、道路幅杭を基準とする任意の方向の3×3グリット方眼を調査区内に設定し、縮尺1/20の平面図・断面図を作成した。また、遺跡の記録写真は35mm白黒・カラースライドで撮影した。

(2) 調査成果

発見された遺構と遺物

調査対象地は丘陵上の最も高い部分から南側斜面にかけての範囲で、現況は畑地であった。表土は20cm前後の耕作土で、表土直下は凝灰岩の風化した黄褐色粘土層となっており、遺構確認はこの黄褐色粘土層上面でおこなった。

発見された遺構は、掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡2軒、溝跡3条である。この他に組み合わない柱穴がいくつかある。このうち、掘立柱建物跡、竪穴住居跡は軸方向が真南北方向で、遺構の配置に地形の傾斜とは異なり方位を意識した規則性がみられる。

出土遺物は、S D01～04溝跡、S I 05竪穴住居跡から平箱1箱分の遺物が出土している。遺物の内容については、以下の各遺構の項で記述する。

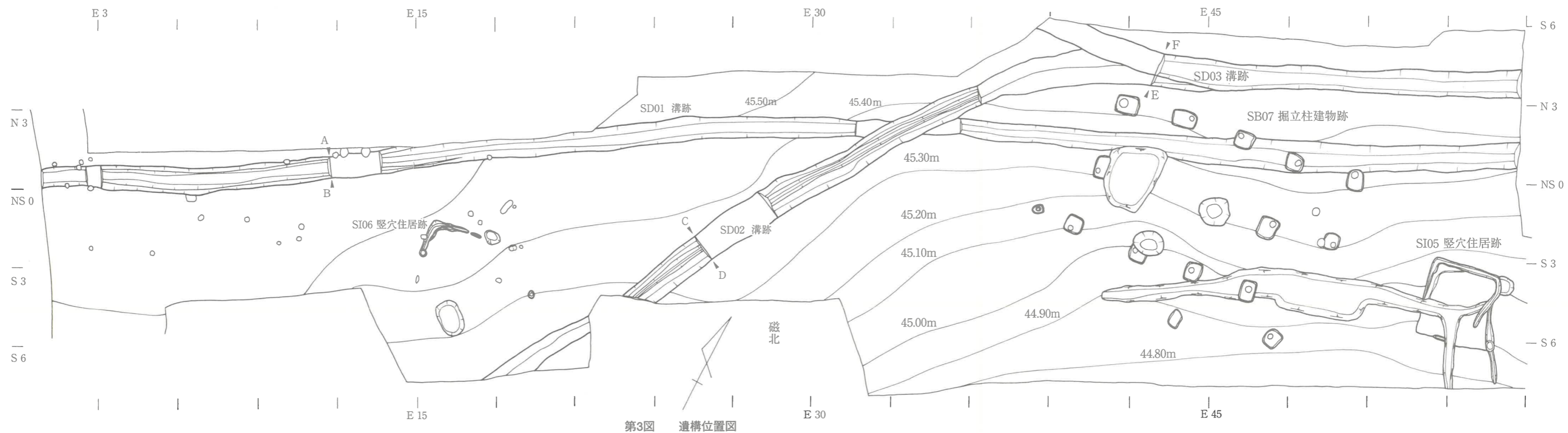
溝跡（第3図）

発見された3条の溝跡はいずれも丘陵の尾根筋にほぼ並行する東西方向に延びている。

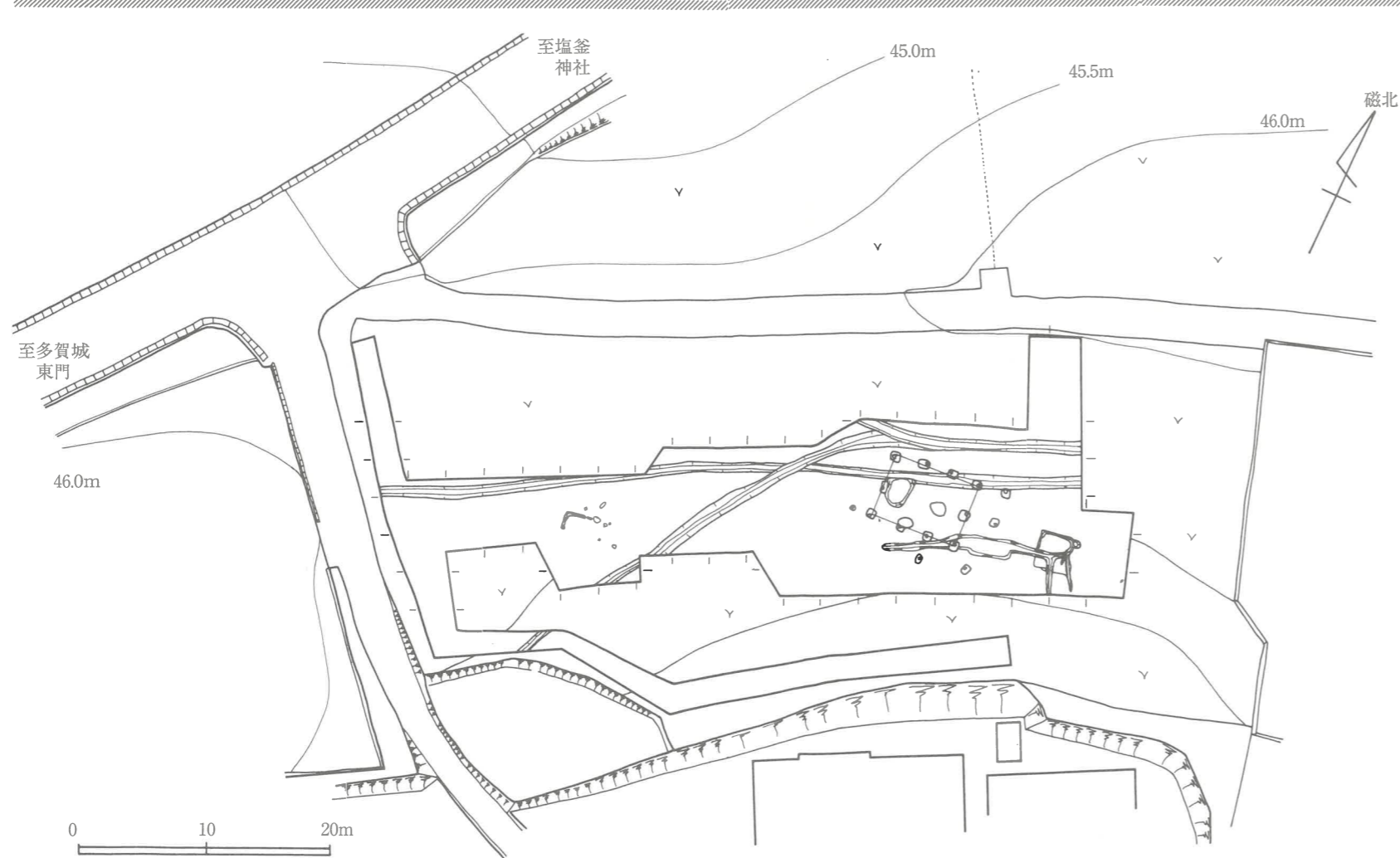
【S D01溝跡】調査区北辺で検出された東西方向の溝跡である。丘陵の尾根筋に沿ってほぼ直線的に延びている。S D02溝跡、S B07掘立柱建物跡と重複している。S D02溝跡よりも古く、S B07掘立柱建物跡よりも新しい。確認面での上幅100cm前後、確認面からの深さ約30cmで、断面は逆大形で、壁は斜め上方に立ち上がり底面は平坦である。1～2度の掘り直しがみられ、西側では壁に段差が残る。

掘り直し後の堆積土から、赤焼土器坏・小坏が出土している（第8図2～4）。他に土師器坏、須恵器甕の破片がわずかに出土している。

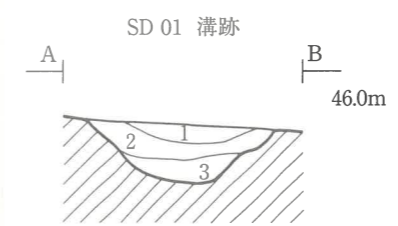
【S D02溝跡】調査区北東から南西方向にゆるやかな曲線を描きながら斜めに走る溝跡である。S D01・03溝跡と重複し、S D01溝跡よりも新しく、S D03溝跡よりも古い。上幅80cm前後、確認面か



第3図 遺構位置図

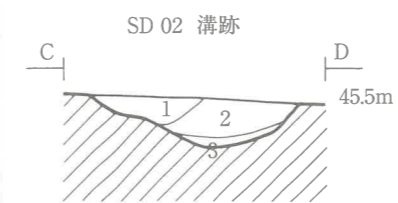


第2図 調査区全体図



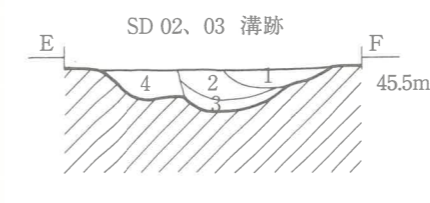
第4図 上 付表

No	土色	土性	備考
1	褐色 10YR4/4	シルト	
2	褐色 10YR4/6	〃	ローム粒含む
3	〃	〃	



第4図 中 付表

No	土色	土性	備考
1	黒褐色 10YR2/2	シルト	
2	褐色 10YR4/4	〃	砂・礫含む
3	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	〃



第4図 下 付表

No	土色	土性	備考
1	黒褐色 10YR2/2	シルト	
2	褐色 10YR4/6	砂質シルト	砂・礫含む
3	褐色 7.5YR4/4	砂質シルト	
4	褐色 10YR4/4	砂質シルト	



第4図 溝跡断面図

らの深さ約20cmで、壁は緩やかに立ち上がり底面は平坦である。1度の掘り直しがみられ、壁に段差が残る。

掘り直し後の堆積土から、土師器坏・甕、須恵器坏・甕、赤焼土器小坏などが出土しているが、図示できるものはない。他に黒曜石・頁岩の剥片も各1点出土している。

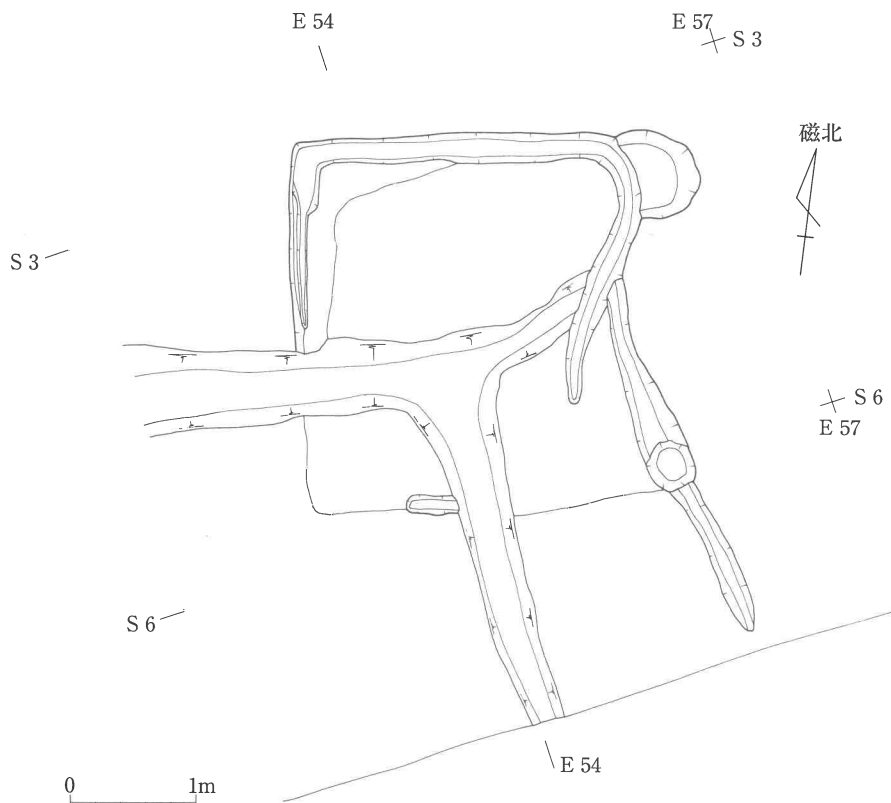
【S D03溝跡】調査区北西から北東方向にゆるやかな曲線を描きながら走る溝跡である。S D01・02溝跡と重複し、S D01溝跡これらの中でもっとも古い。上幅100cm前後、確認面からの深さ約25cmで、壁は緩やかに立ち上がり底面は平坦である。

堆積土から、土師器坏、須恵器坏、赤焼土器小坏の破片がわずかに出土しているが、図示できるものはない。

竪穴住居跡

【S I 05竪穴住居跡】調査区南東端で検出された竪穴住居跡である。全体に削平を受け、中央部には「T」字状の攪乱が及んでいる。壁は残っておらず、北半分は確認作業の際に床があらわれ、南半分から東辺にかけては床面下の掘り方が部分的に残るのみである。方向は西辺でほぼ真北である。

平面形は一辺が約3mの方形と推定され、北・西・東と南辺の一部に周溝が残っている。東辺の周溝はやや内側に入り込んでいる。周溝は幅約20cm、床面からの深さ10cm前後で、平坦な底面から壁はほぼ垂直に立ち上がる。東辺中央の周溝から浅い溝が分岐し、住居東南隅から住居外に延びる排水溝となっている。この、溝跡の南東隅底面はピット状に10cmほど窪んでいる。



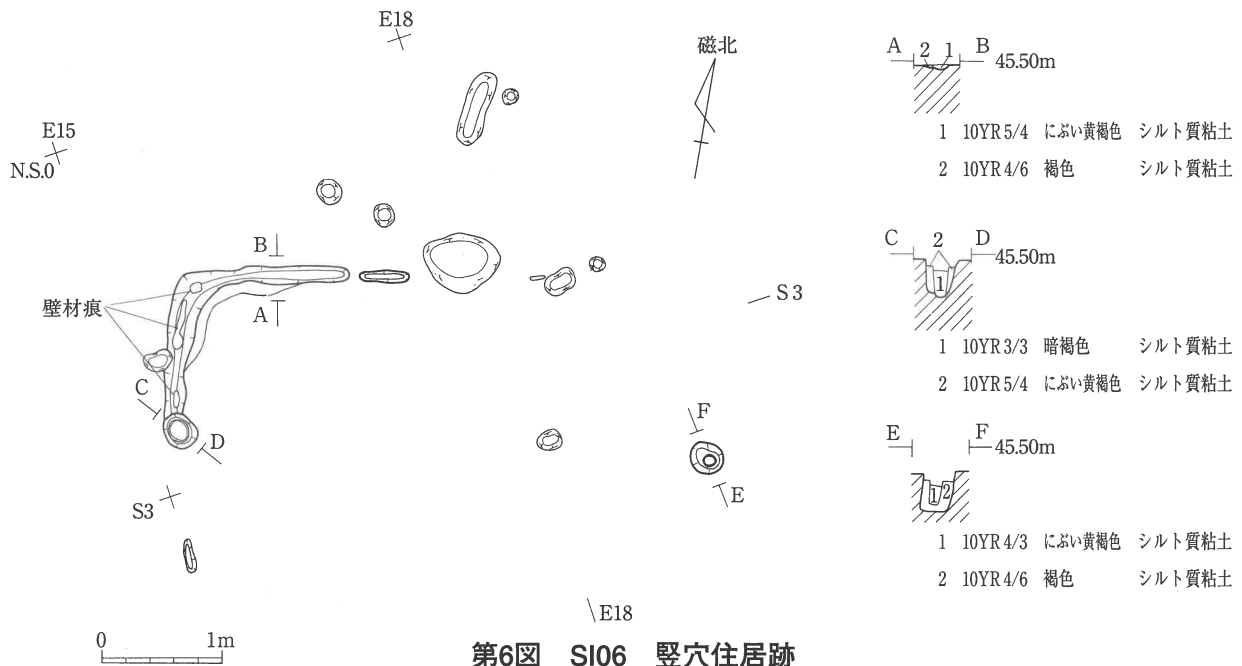
第5図 SI05 竪穴住居跡

住居北東隅の径約60cmの円形土坑は貯蔵穴と考えられる。カマドは東辺の周溝内に粘土や焼土が混入していることから東側ほぼ中央にあったものと推定されるが明確でない。

周溝堆積土から、土師器坏（第8図1）が出土している。底部回転糸切り無調整の内黒坏である。他に、須恵器坏・壺・甕の破片などが出土しているが図示できるものはない。また、排水溝堆積土からは土師器坏・甕、須恵器甕の破片がわずかに出土しているがやはり図示できるものはない。

【S I 06 竪穴住居跡】 調査区西側で検出された竪穴住居跡である。全体に削平を受け、壁・床面とも残っていない。わずかに北西隅の壁材の溝状の掘り方が部分的に残るのみである。住居跡の平面形・規模は不明であるが、東辺の壁柱穴の位置から推定すると、東西辺の規模は4.5m前後である。方向は西辺でほぼ真北である。

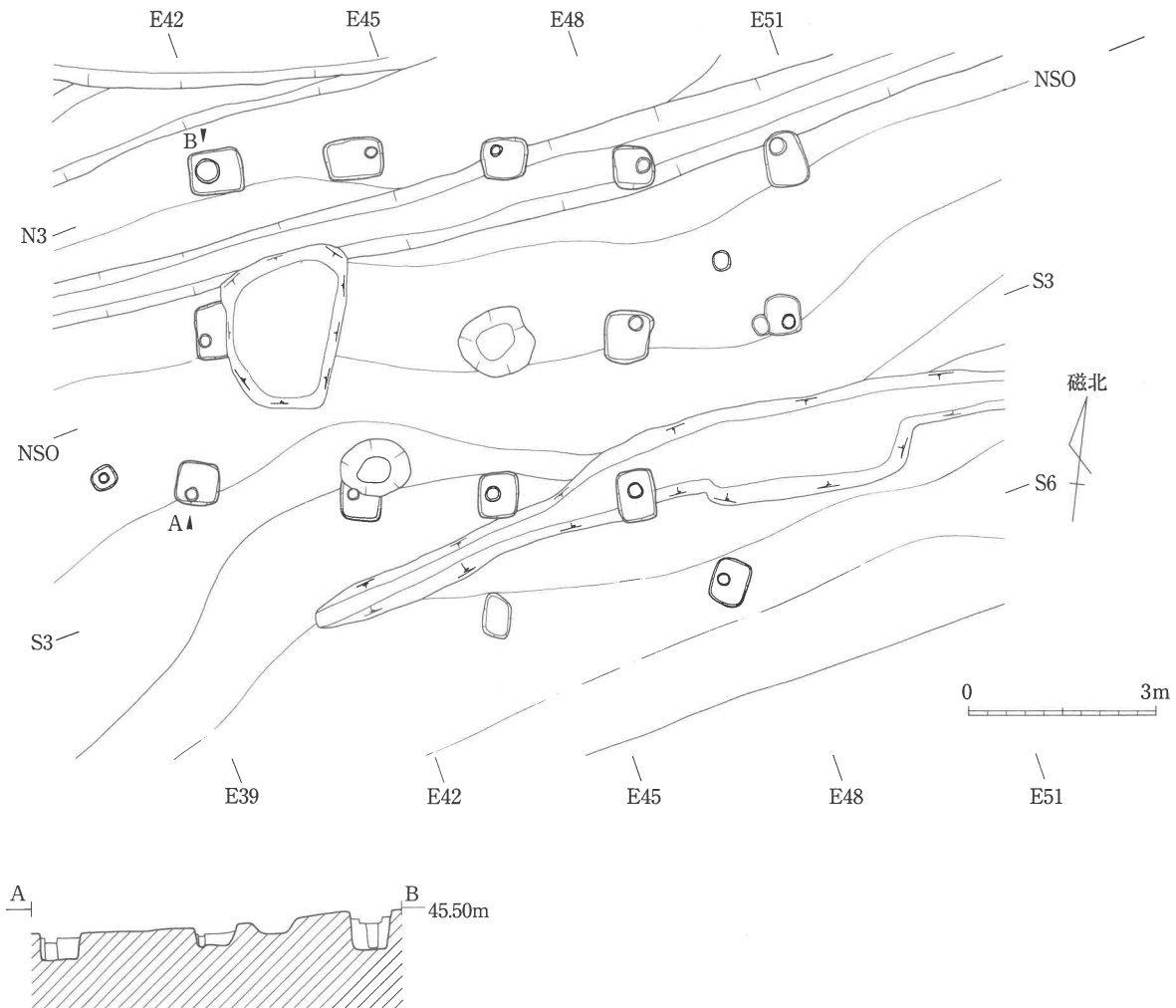
壁材の掘り方は幅約15cm、床面からの深さ10cm前後の溝状で、壁沿いには幅5cm前後の帯状の壁材の痕跡がみとめられた。また、北西隅から南に1.2mの位置で壁柱穴が確認された。これに対応する東側にも小柱穴が確認されており、これも本住居跡の壁柱穴と考えられる。カマドは残っていないが、北辺のほぼ中央にある攪乱坑に焼土粒が混入していることからこの付近にカマドがあったものと推定される。本住居跡に伴う出土遺物はない。



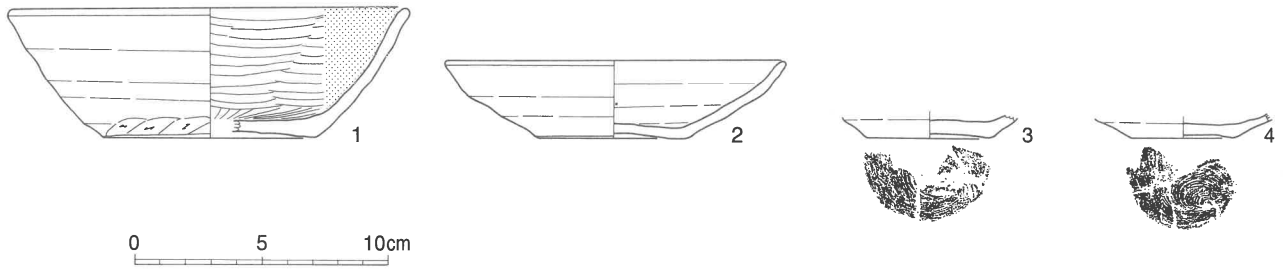
掘立柱建物跡

【SB07掘立柱建物跡】調査区中央で検出された東西桁行3間、南北梁行2間の東西棟である。SD01溝跡と重複しこれよりも古い。なお、棟通の東から1間目の位置に直径約1m、深さ40cmの土坑がある。柱穴・柱痕跡は確認できないが、位置・規模からみて柱の抜取穴である可能性がある。

検出した12個の柱穴のすべてで柱痕跡を確認した。柱穴掘り方は平面形が一辺70cm前後の方形で、確認面からの深さは30~60cm、柱痕跡は直径20cm前後である。桁行総長は南側柱列で7.0m、柱間寸法は西から2.5m、2.2m、2.3mである。梁行総長は東側柱列で5.2mで、柱間寸法は南から2.7m、2.5mである。建物方向は東側柱列でほぼ真北である。出土遺物はない。



第7図 SB07 掘立柱建物跡



No	種 別	器 種	出土遺構	特 徴
1	土 師 器	杯	SI05周構	底部：手持ちケズリ再調整、切り離し不明。内面：黒色処理
2	赤焼土器	杯	SD01	底部：回転糸切り痕。
3	◇	小杯	SD01	底部：回転糸切り痕。
4	◇	小杯	SD01	底部：回転糸切り痕。

第 8 図 出土遺物

(3) ま と め

発見された遺構は、溝跡3条、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟で、他に組み合わない柱穴が3個ある。遺物は、SD01～03溝跡、SI05竪穴住居跡から、石器、土師器、須恵器、赤焼土器が出土している。

遺構・遺物の年代と性格

遺構から出土した遺物の年代をみると、SD01～03溝跡から出土した土器類はいずれも9世紀後半から10世紀代のものである。このうち、重複関係からもっとも古いSD01溝跡から出土した赤焼土器・小皿は10世紀代のものと考えられる。したがって、これらの溝跡はいずれも10世紀以降のものと考えられる。SI05竪穴住居跡の周溝・排水溝から出土した土器類は、おおむね9世紀後半代のものと考えられ、竪穴住居跡も9世紀後半代のものと考えられる。SB07掘立柱建物跡は、遺物がないが重複関係からSD01溝跡よりも古い時期のものである。

出土遺物のないSI06竪穴住居跡と、SB07掘立柱建物跡については、年代を特定できないが、調査区内から出土した土器類がいずれも9世紀後半以降のものとみられること、9世紀後半とみられるSI05竪穴住居跡と同じほぼ真北方向の遺構であることなどからこれらも9世紀後半の遺構と考えられる。

遺跡の構成

今回発見された遺構はいずれも残存状況が悪く、調査区全体が畑の耕作などによりかなりの削平を受けたことがわかる。したがって、削平により失われた遺構が少なからずあったものと推測される。こうした推測を考慮した上で、以下では調査成果についての考察を加えたい。

まず年代的には、竪穴住居跡、掘立柱建物跡が9世紀後半代、溝跡が10世紀以降のものとみられる。

次に、遺構の性格についてみると、竪穴住居跡、掘立柱建物跡は、これらがいずれもほぼ真北方向の遺構であることからみて、一般集落を構成するものと考えられるよりは、西側の同一丘陵上に立地する西沢遺跡と同様、国府多賀城の強い影響下にあった施設と考えておきたい。多賀城内では、9世紀後半代に、内郭東門を含む大畑地区の施設が大幅に整備・改変された状況が明らかにされている。こうした動きにほぼ連動するように、同一丘陵上にある西沢遺跡、母子沢遺跡でも9世紀後半代の遺構が多く検出されることは、多賀城周辺の動向を考える上で注目されよう。

溝跡については、尾根筋に沿うように東西方向に延びるSD01溝跡が、丘陵の頂部から南斜面に移行する位置にあって、ほぼ直線的に延びることなどから、丘陵頂部に想定される道路の側溝や、区画施設もしくは排水溝の一部である可能性が考えられる。SD02・03溝跡については湾曲している点で異なるが、溝としての規模はSD01溝跡に近似していることから、同様の性格が想定されよう。

以上のように、この地区では、9世紀後半代以降、主に平安時代後期に属する遺構・遺物が発見された。そうした動向は、国府多賀城内の整備状況との強い関連性を示唆するもので、その背景には、この地区が国府と国府津とを結ぶ連絡路に隣接しているという地理的な要因があるものと推察される。

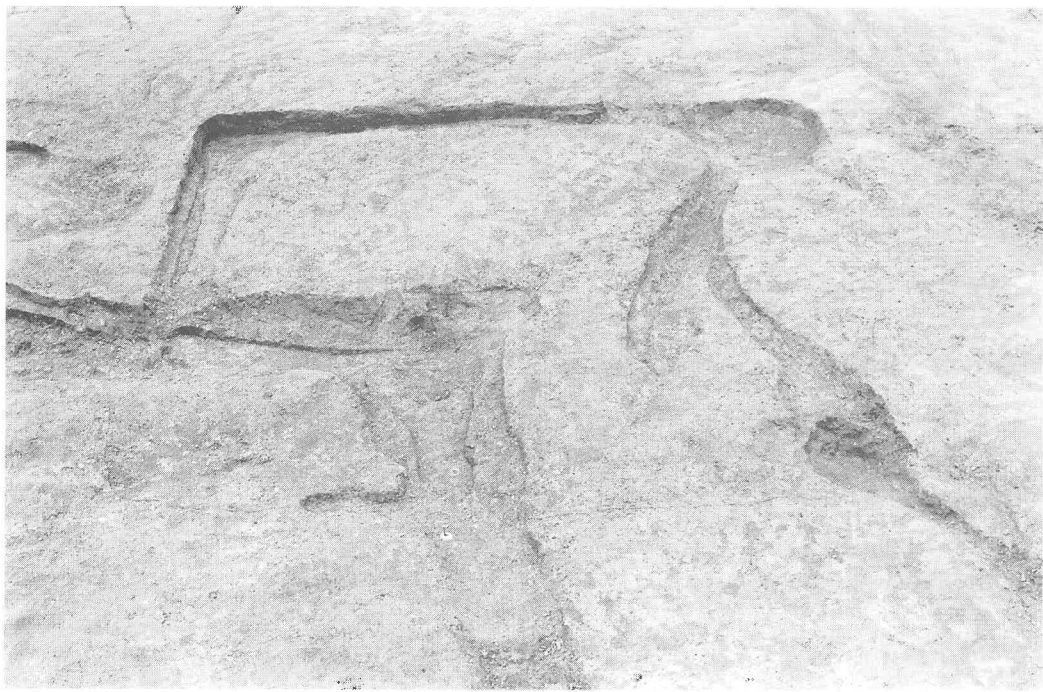
参 考 文 献

- 宮城県多賀城跡調査研究所：1982：『多賀城政庁跡－本文編－』
柳澤：1991：『宮城県多賀城跡調査研究所年報1990－多賀城跡－』「Ⅱ．第58次調査」
宮城県多賀城跡調査研究所
柳澤・真山：1993：『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992－多賀城跡－』「Ⅱ．第62・63次調査」
宮城県多賀城跡調査研究所
柳澤：1994：『宮城県多賀城跡調査研究所年報1993－多賀城跡－』「Ⅱ．第64次調査」
宮城県多賀城跡調査研究所
柳澤：1995：『宮城県多賀城跡調査研究所年報1994－多賀城跡－』「Ⅱ．第65次調査」
宮城県多賀城跡調査研究所
丹羽・柳澤・白崎：1996：『宮城県多賀城跡調査研究所年報1995－多賀城跡－』「Ⅱ．第66次調査」
宮城県多賀城跡調査研究所
柳澤・白崎：1997：『宮城県多賀城跡調査研究所年報1996－多賀城跡－』「Ⅱ．第67次調査」
宮城県多賀城跡調査研究所
相澤・車田：2000：『西沢遺跡－第8次調査報告書－』
多賀城市文化財調査報告書第58集 多賀城市教育委員会

写真図版



調査区全景(西より)



S 105堅穴住居跡 (南より)



S 106堅穴住居跡 (北より)

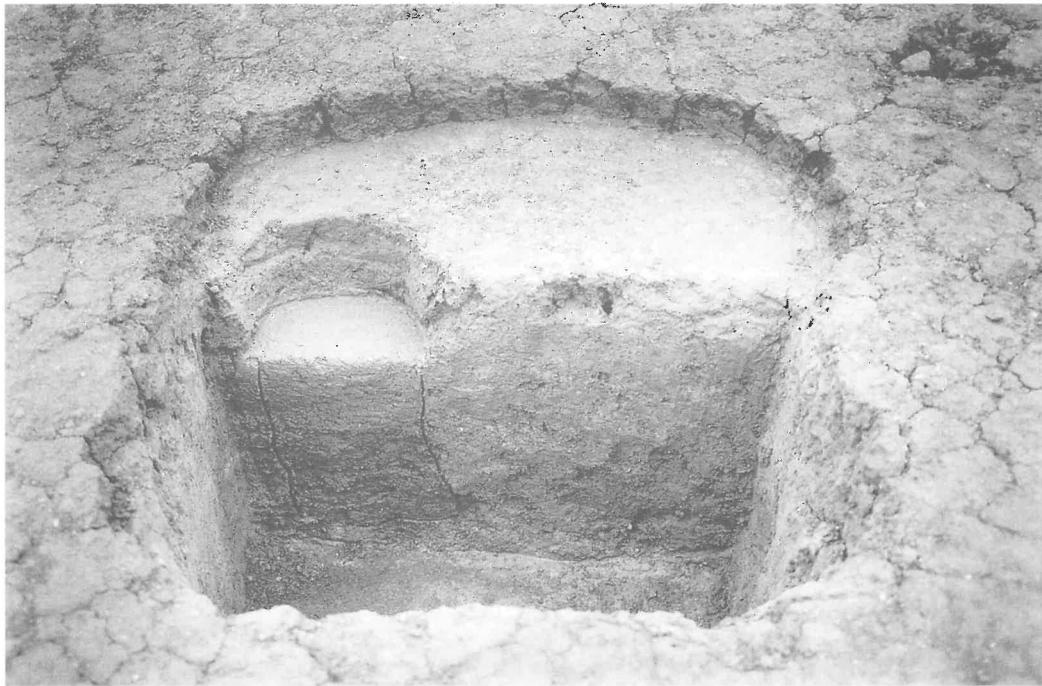


S B07掘立柱建物跡 (南より)
人物の立っているのが柱の位置

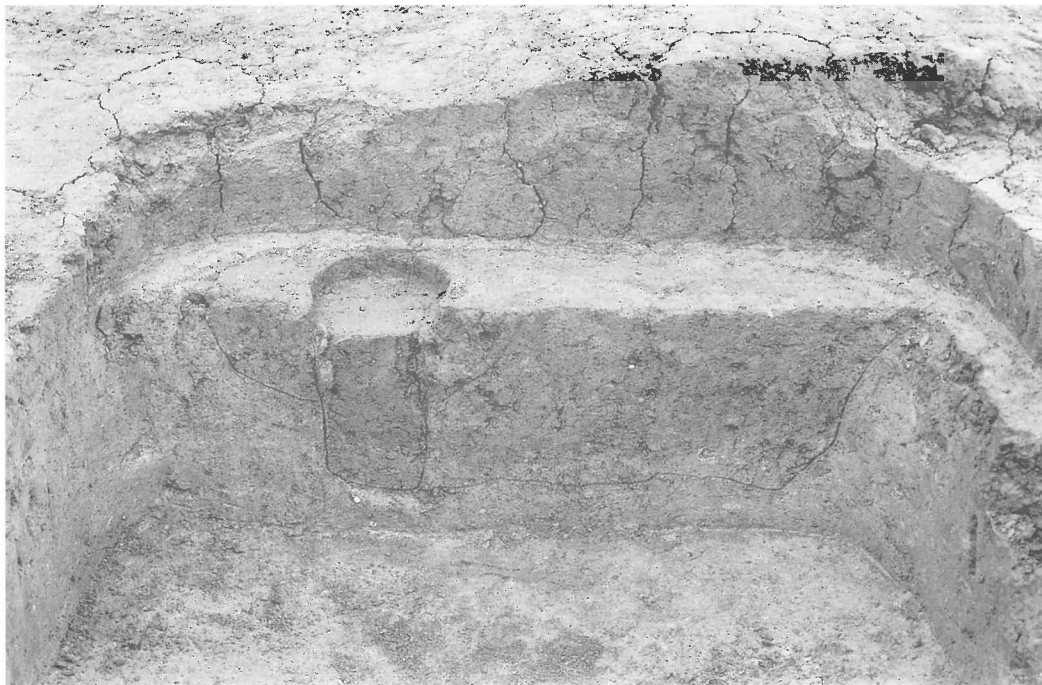
写真図版 2



S B 07掘立柱建物跡



S B 07掘立柱建物跡
柱穴断面（東より）（南1、西1）



S B 07掘立柱建物跡
柱穴断面（東より）（南2、西1）

写真図版3

報 告 書 抄 録

ふりがな	ははこざわいせき							
書名	母子沢遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	塩竈市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第5集							
編著者名	古川一明							
編集機関	塩竈市教育委員会							
所在地	〒985-0052 宮城県塩竈市本町8番1号 TEL022-362-7744							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / "	東経 ° / "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ははこざわいせき 母子沢遺跡	みやぎけん 宮城県 しおがまし 塩竈市 ははこざわちやう 母子沢町	042030	11075	38度 18分 30秒	141度 00分 20秒	20000621~0830	約850	宅地造成 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
母子沢遺跡	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡 竪穴住居跡 溝跡		土師器・須恵器 赤焼土器・石器		多賀城外郭東門と 国府津を結ぶルー ト上の遺跡	

塩竈市文化財調査報告書 第5集

母子沢遺跡

平成13年3月15日 印刷

平成13年3月31日 発行

発行 塩竈市教育委員会

〒985-0052 塩竈市本町8番1号

電話 022-362-7744番

印刷 プランニングフェロー

〒985-0014 塩竈市舟入一丁目3番22号
